郷土芸術賞に輝く

受賞者紹介 △上▽

羽生　輝さん

（釧路市桜ケ岡6）

日本画はコツコツやっていく以外にないと笑う羽生さん

中央画壇からも注目集める

地元では数少ない日本画作家のひとり。その一貫したテーマである〝番屋シリーズ〟は「新制作協会」の上野泰郎画伯、らの支持を得て、近く東京・銀座のフジキ画廊で開かれる「新制作日本画作家五人展」に加えられるなど、中央画壇からも注目されはじめている。四十三年夏のヨーロッパ旅行後はスペインの明るい風景がレパートリーに加わの開催を契約）高い評価を得た。

（上）

朔北のきびしい風土の中で、あすをめざす地元芸術家をはげまそうと、ことし五月設立された釧路新郷土芸術振興基金の第一回受賞者が決った。日本画の分野で若手ながら注目すべき作品を発表しつづける羽生輝さん。アトリエ彫塑集団のリーダーとして着実な歩みをみせ、ことし全道展会員となった斎藤一明さん。創立いらい十五年。ことしの釧路市芸術祭に「ベニスの商人」でみごとなアンサンブルをみせた劇団・北芸（代表、北山椎也さん）の二個人、一団体。二十四日の贈呈式を前に、郷土芸術祭賞に輝くその業績を紹介しよう。

地方での制作に自信

った。

昭和三十五年、釧路湖陵高卒業。道学芸大美術科在学中に故久本春雄氏に師事、三十九年同校卒業ののち教職に就きながら制作を続ける。四十六年、四十七年と新制作春季展に入選した。道内からは戦後初めてである。四十六年の道展で新人賞受賞。この春には「トレドにて」が釧路市買い上げとなる。地元で三回の個展、ことし一月には東京・銀座の大倉画廊で開き（二年おき現在、釧路市景雲中教諭。

これも久本先生のおかげ

「ここまでボクがこれたのは、なんといっても久本先生のおかげ。本当にうれしい」

率直に受賞の喜びを語る。東京での個展開催、市の買い上げ、新制作春季展入選をきっかけに五人展への参加が決まり、そして今回の受賞。うれしいことが続く。

「地方で制作を続ける、そういう生き方に自信が持てるようになりました。〝番屋シリーズ〟も東京に行っては描けない」

沿岸漁民の生活の場が、だんだん侵されていく。番屋も、最近はモルタル造りに変わってきた。いまこれを記録しておかないとーその気持ちが、絵筆をとらせる。

「この地方に生活する人、生活のある風景、これからもそれを描いていきたいです」

日本画は根気のいる仕事、コツコツやっていく以外にない、と笑った。